

氏 名	こにしやすひろ 小西康弘
学位(専攻分野)	博 士 (医 学)
学 位 記 番 号	論 医 博 第 1814 号
学位授与の日付	平成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	Catheter US probe EUS evaluation of gastric cardia and perigastric vascular structures to predict esophageal variceal recurrence 治療前の超音波内視鏡からみた食道静脈瘤再発の予測
論文調査委員	(主 査) 教 授 今 村 正 之 教 授 山 岡 義 生 教 授 千 葉 勉

論 文 内 容 の 要 旨

食道静脈瘤の破裂は門脈圧亢進症を有する患者にとっては、致命的な転機をとることがある。食道静脈瘤に対しては内視鏡的に硬化療法や結紮術が行われるようになり、その予後が著明に改善しているが、治療後の再発はまだ、残された大きな問題である。そこで本研究では、食道静脈瘤の内視鏡治療前に、治療後の再発を予測することが超音波内視鏡で可能かどうかについて検討した。

まず、食道静脈瘤結紮術を施行する前に 20 MHz の超音波内視鏡（以下 CUPs）を用いて血行動態の解析を行い、治療後の静脈瘤の再発予測因子を検討した。対象は出血する可能性の高い食道静脈瘤を有する 30 人の患者である。食道静脈瘤に結紮術を施行する前に、胃上部から下部食道を CUPs で観察し、血管構築の解析を行った。門脈圧亢進症があり食道静脈瘤を有する患者では胃上部（噴門部）には以下の血管構築が見られる。①粘膜下の拡張した静脈叢 ②胃食道壁外の側副血行路 ③①と②とを連絡する貫通静脈。そこでこれらの 3 つの血管構築をそれぞれグレーディングすることによって、治療後の静脈瘤再発との関係を検討した。

食道静脈瘤結紮術施行前の 30 人の患者において、14 例（46.7%）に食道静脈瘤の再発を認めた。再発群と非再発群との臨床的背景では再発群に出血歴を有する症例が多い他は差を認めなかった。

治療前の CUPs による観察で、全例に噴門部の静脈瘤（粘膜下層の血管拡張像）を認めた。それに対し、通常の内視鏡では 21 症例（70%）に噴門部静脈瘤を確認できるのみであった。内視鏡上の噴門部静脈瘤の有無と、CUPs の所見との間には有意差は認めなかった。また、内視鏡上の噴門部静脈瘤の有無で、治療後の静脈瘤の再発率には有意差は認めなかった（47.6% vs. 44.4%）。

食道静脈瘤結紮術を施行後食道静脈瘤が再発した患者群では、治療前の CUPs で噴門部の貫通血管の程度が高度なものが多かった（71.4% vs. 12.5%, $p < 0.01$ ）。逆に、治療前に噴門部の貫通血管が高度な群では軽度な群と比較して治療後に再発する率が高い（90.9% vs. 21.0%, $p < 0.01$ ）という結果を得た。一方、噴門部の粘膜下の拡張した血管叢および壁外の側副血行路の程度と食道静脈瘤の再発との間には明らかな関係は認められなかった。

以上の臨床的検討から、食道静脈瘤の治療前に超音波内視鏡で胃上部の血管構築を解析することは、静脈瘤結紮術の治療後の再発を予測する上で有用であることが明らかとなった。また、治療前の CUPs で噴門部静脈瘤に 3 mm 以上の貫通血管を有する症例では食道静脈瘤結紮術による治療後に再発を来すリスクが高いことが予測され、硬化療法などの治療を追加する必要性がある可能性が示唆された。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

食道静脈瘤の破裂は門脈圧亢進症を有する患者にとっては、致命的な転機をとることがある。食道静脈瘤に対しては内視鏡的に硬化療法や結紮術が行われるようになりその予後が著明に改善しているが、・治療後の再発はまだ残された大きな問題である。

本研究で申請者は、食道静脈瘤の内視鏡治療前に超音波内視鏡を併用することにより、治療後の再発を予測することが可能かどうかについて検討した。方法は、食道静脈瘤治療施行前に超音波内視鏡を用いて血行動態の解析を行い、治療後の静脈瘤の再発予測因子を検討した。出血する可能性の高い食道静脈瘤を有する30人の患者を対象とし、食道静脈瘤に結紮術を施行する前に、胃上部から下部食道を超音波内視鏡で観察し血管構築の解析を行った。食道静脈瘤を有する患者では胃上部（噴門部）には1. 粘膜下の拡張した静脈叢 2. 胃食道壁外の側副血行路 3. 1と2とを連絡する貫通静脈が見られる。これらの3つの血管構築をそれぞれ軽度なものと高度なものに分け、治療後の静脈瘤再発との関係を検討した。食道静脈瘤が再発した患者群では治療前の超音波内視鏡では噴門部の貫通血管が高度なものが多い。逆に、治療前に噴門部の貫通血管が高度な群では軽度な群と比較して治療後に再発する率が高いという結果を得た。今回の臨床的検討で、食道静脈瘤の治療前に超音波内視鏡で胃上部の血管構築を解析することは、静脈瘤結紮術の治療後の再発を予測する上で有用であることが明らかとなった。

以上の研究は、食道静脈瘤治療前の血行動態の解析が、治療後の静脈瘤再発を予測するのに役立つことをはじめて示した点で、食道静脈瘤の内視鏡治療の進展に寄与するところが大きい。したがって、本論文は博士（医学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、本学位授与申請者は、平成15年2月3日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。